

2023 年度 網走川流域多自然川づくりに関する検討会
議事要旨

2024 年 3 月 7 日 14 時～17 時 網走市エコーセンター大会議室

【ワカサギ、サケ・マス調査結果】

- ・ワカサギ調査について、調査場所や時期、調査ボリュームについて適切に行われており、引き続きモニタリングする必要がある。
- ・網走川でのワカサギ産卵確認結果が漁獲量とうまくリンクしてないことについては、湖内での仔魚の成長問題、女満別川や湖内での産卵場所の変化等の影響が考えられる。これら要因把握のため、網走水産試験場とデータ等を情報共有することが望ましい。
- ・サケは網走湖下流でウライにより全数捕獲するように設置されているため、産卵床数による経年比較により評価するのは困難と考える。そのため場所の違いによる利用率(指数化)により経年的に比較する方が望ましいと考える。
- ・カラフトマスについては、近年漁獲が激減しており、偶数年・奇数年による豊漁年・不漁年といった表現は好ましくないと考える。
- ・産卵床の種が不明となっているが、掘り起こして卵を見れば種の確認は可能なため、対象数が少ないのであれば確認することが望ましい。

【中流部における検討】

- ・流水の動く範囲(分散域)は流心に対して 11° となっている。そのため中流部における掘削上流端部の摺り付けにあたっては、可能な限り摺り付け角度 11° 程度となるよう実施することが望ましい。

【上流部(直轄管理区間)における検討】

- ・良好な礫堆積を増やすために、川岸に礫をためる仕組み(バンプエのようなイメージ)も検討することが望ましい。
- ・網走川はシルトがたまりやすく、樹林化が顕著である。周辺の農地からシルトが礫間に入りこみ、砂州の発達により樹林化することも考えられるので、今後モニタリングを行って把握していく必要がある。
- ・農地等からのシルト分が大量に網走川に流入していると考えられるため、状況を確認するとともに必要に応じ支流での沈砂池等の抑止対策について検討することが望ましい。

【上流部(北海道管理区間)における検討】

- ・モニタリング、評価等、PDCA に則りしっかり実施されている。
- ・10 年に一回しか発生しない流量を掘削高として設定したことにより、毎年の出水規模で

は砂州の攪乱が起きなかったと考えられる。年平均最低流量等のような流量設定が望ましいのか試験施工により、今後、確認することが望ましい。

・高木橋下流について、出水後に陸地化してヤナギの実生定着、ヤナギ林化が危惧されるので今後のモニタリングで確認していく必要がある。

【河岸岩盤風化抑制対策、ハリエンジュ抑制対策】

・ハリエンジュ対策の一案として、地盤が長期冠水する場所や湿性地では根が酸欠になり、生育が厳しいことが研究によりわかっている。現地状況を踏まえ、対策案の一つとして提案したい。

【魚類等の連続性確保の取り組み】

・魚道の整備により、海の恵みが河川へ供給されるので大変すばらしい取り組みである。
・達美地区その2において、河畔林が密林状態となり4～5年前に熊の親子が確認された。今後、魚類の移動の連続性確保が進むことにより、サケ・マスを捕食する熊の出没が増大する可能性が高くなると考えられるため、それら出没、痕跡を記録することが望ましい。それら記録を踏まえた対応を検討する必要がある。

・この他、オジロワシ、オオワシが定着することも考えられるため確認・記録し、自然環境の変化を把握することが望ましい。

・取り組みの成果としてサクラマス資源量（幼魚密度、産卵床数等）により評価することも考えられる。各河川管理区間の状況を踏まえ検討することが望ましい。

・西幹線頭首工の非灌漑期のゲート落差による遡上阻害と東幹線頭首工の魚道の流速が速いことで起きている遡上阻害について検討することが望ましい。

・西幹線頭首工のゲート下流側の隔壁が今年度補修されたが、補修後も遡上するのは難しいと考える。今年ゲートを視察した際、ゲートにゴミが引っかかったことで、遡上しやすくなっていたので、何かきっかけとなる工夫があれば遡上改善できると思う。東幹線頭首工については水量を減らす対策が必要である。また、壁面に工夫を施すと、ヨシノボリの遡上も可能になると考え、検討の余地があると考え。

・地球温暖化により河川水温に及ぼす影響が懸念されている。火山岩性の地域では湧水が多く、水温が上昇しにくいとの報告もあるため、連続性確保の実施検討事項として重要となることも考えられる。